

『東方』三〇五号より

死者を悼む文学

——唐詩の豊穠な世界を窺う一断面

松原 朗（専修大学）

「哀傷文学」とは、死者を哀悼する文学のことである。

死者を哀悼する感情は、地域を超え、時代を超え、民族を超えた人類に普遍的感情であるに違いない。しかしそれを文学の題材とする時点で、地域と時代と民族の特性によつて根底から特徴づけられることになる。唐代の哀傷文学は、中国の、唐代の、漢語を母語とする民族の手になる哀傷文学として、独特の様態を持つことになるのは、当然のことと言つてもよからう。従つて、唐代の哀傷文学の特徴を論ずる本書は、同時に、中国という風土と、唐代という時代性と、また漢語による文学表現という様々な側面の特質を明らかにするものである。

なお本書の著者後藤秋正氏には、すでに『中国中世の哀傷文学』の大著がある。両著の関係について、本書の「あとがき」には次のように記す。「本書に収録した論考は、前著『中国中世の哀傷文学』（研文出版・一九九八年）を刊行して以後、ほぼ七年間にわたつて書き継いできたものである。／執筆に際しては、前著で主として取り上げた、漢魏六朝期に制作された臨終詩や送葬詩など、人の死にまつわる哀傷を主題とする詩歌が、唐代に至つてどのような展開を見せているか、その具体的な様相を、実際の作品に即していくらかなりとも明らかにしようと努めた。『唐代の哀傷文学』と題した所以である」（五六三頁）。すなわち両

トップページにもどる

後藤秋正著

『唐代の哀傷文学』

A5判・六〇〇頁・研文出版・一〇、五〇〇円



書は、同一の問題意識に基づく姉妹編の関係にある。両者の内容を概観するために、その目次を掲げよう。

▼『中国中世の哀傷文学』

I 臨終の文学

六朝期の「臨終詩」／「臨終詩」の成立とその展開——六朝期から南宋末期まで／崔篆の生涯とその「慰志賦」／魏の甄后の死と「塘上行」／遼の蕭后の生涯とその文学

II 夭折者哀悼の文学

哀辞考／蔡邕「童幼胡根の碑銘」と哀辞——禁碑のもたらしたもの／幼児の死を悼む詩——漢魏六朝期を中心として／幼児の死を哀悼する賦——魏晋南北朝期を中心として／夭折者の墓誌銘——唐代を中心として

III 悼亡と送葬の文学

「悼亡賦」論——漢代から梁代まで／「送葬詩」論（一）

——王褒の詩を中心として／「送葬詩」論(二)——南北朝末期から唐・太宗李世民へ／「送葬詩」論——王維・皇甫冉・顧況の詩について

***「摯虞詩」論——西晋四言詩の一断面

▼『唐代之哀傷文学』

I 唐詩と臨終詩

唐詩に見られる「臨終」の語／『全唐詩』中の「臨刑・臨化」詩

II 送葬詩と歸葬詩

唐代「送葬詩」の周辺／「歸葬詩」の成立——漢代から南北朝末期まで／唐代の「歸葬詩」(一)——杜甫の詩を中心として／唐代の「歸葬詩」(二)——劉長卿・王建・陳羽・劉言史の詩／唐代の「歸葬詩」(三)——廖有方・唐彦謙・貫休の詩

III 墓地を詠ずる詩歌

北邙を詠ずる詩歌——漢代から南北朝末期まで／北邙を詠ずる唐代の詩歌(一)——劉希夷・張籍・羅隱らの詩歌／北邙を詠ずる唐代の詩歌(二)——陳子昂・韋應物・孟郊らの詩歌／北邙を詠ずる唐代の詩歌(三)——白居易・劉言史・張祜らの詩歌／北邙を詠ずる唐代の詩歌(四)——許渾・賈島・李山甫らの詩歌／唐詩に詠じられた杜甫の墓／李節「過耒江弔子美」詩について——続唐詩に詠じられた杜甫の墓

IV 唐詩と幼児の死

幼児の死を悼む唐詩(一)——王勃・顧況・于鵠の詩／幼児の死を悼む唐詩(二)——孟郊の詩／幼児の死を悼む唐詩(三)——元稹の詩／幼児の死を悼む唐詩(四)——白居易の詩／幼児の死を悼む唐詩(五)——李群玉・皮日休の詩

▶ トップページにもどる

書名から判断すれば、前著と後著は、論ずる対象の時代区分によって役割を分担するはずである。一例として、六朝期の「臨終詩」は前著、唐代の「臨終詩」は後著において論じられるように。しかし実際には、時代ではなく、考察対象によって便宜的に分属されているものもある。例えば、「悼亡詩」は前著にのみ考察があり、一方「歸葬詩」や「北邙」は、後著にのみ考察があるように。つまり両著は、対象の時代区分によって截然と分かれるわけでもないのが、読者は、両著を手元に置いて、必要に応じ参照することが望ましい。

さてこの書評が取り上げるのは後著『唐代における哀傷文学』である。ここでは「歸葬詩」と「北邙」についての諸論考を重点的に見ることにしたい。なおこちらの研究課題も、中国では系統的な研究は未だ緒に就いておらず(東方書店CNKIで検索)、文字通り、開拓的な研究と評すべきものである。

歸葬(反葬・歸骸)とは、客死した者の遺骸を移送して祖先の墳墓の地に埋葬することで、場合によっては数十年、数百年を隔てた後に、子孫や理解者によって行われることもあった。『左伝』の用例から、「春秋時代にはすでに歸葬の風習が定着していた」(六三頁)。しかし「漢魏晋南北朝期には誄などの一部の作品を除いて、文学作品、とりわけ詩において歸葬が詠じられることは稀であることが確認される。……特に南朝において、南渡した者にとつては、実際上北方の祖先の墳墓の地へ歸葬する手段がなかった」(七八頁)。

一方、唐代に歸葬詩が増大することを、次のように説明する。「唐代には版図を拡大した統一王朝のもと、多くの

人士の移動が行なわれた。……その中で、悲運にも中途で倒れた者もまた多かった。見方を変えれば、帰葬を果たした者は幸運だったとさえ考えられるのであり、これらの帰葬詩はそうした現実を如実に反映しているものと言えるであろう」（二三九頁）。帰葬詩制作の歴史的消長、ならびにその背後に働く社会のメカニズムが明快に指摘されていて、まことに腑に落ちる説明である。

帰葬に何らかの形で言及する唐詩は、三八首に上る。唐代風習の資料として価値のある作品群だが、いまは特に杜甫に注目しよう。

三八首の中で、特に詩題に帰葬を明記する詩は一首、杜甫はその初期の作者であり、かつ三首も作っている。「三首（の帰葬詩）」はいずれも成都を離れて長江を下り、さらには洞庭湖の南に入ってからのものである。強い望郷の念を抱いていた杜甫であったが、いつ帰郷を果たせるのか、現実的な見通しは全くなかったと言つてよい。……とりわけ交流の深かった故人が帰葬されることは杜甫にとつて他人事ではなかった。自分もいつ旅先での死が待ち受けているかわからないからである。それが杜甫に帰葬を詠ずる詩を残させた最大の原因であると考えられる」（二〇〇頁）。

本書のこの指摘には、晩年の杜甫の文学を考えるための重要な手掛かりが含まれている。杜甫の望郷の念の深さを観念的に語ることは容易なことである。しかし帰葬詩の制作という具体的な事実によつてそれが裏付けられるとき、論文は大きな説得力を持つのである。——付け加えれば、杜甫自身が死後には帰葬の対象となった。「死後、遺骸は岳陽に殯葬されたまま帰葬を果たせず、四十三年が経過した元和八年（八一三）、孫の杜嗣業（宗武の子）の手によつて偃師県（河南省偃師県）の西北、首陽山のふもとに埋葬

トップページにもどる

された」（六〇頁）。杜甫の文学を、帰葬との関わりで論ずる本書の視点は、肯綮に当たるものであり、今後学界は、この問題をさらに深めて考えなければなるまい。

墳墓を詠ずる詩は、六朝時代から一つの作品群を作っている。唐代詩人の中で、その人の墳墓が詩に詠まれることが多かったのは、李白・杜甫・賈島の三人である（二八八頁）。著者は、杜甫の墳墓に言及する一六首の唐詩について、考察を加える。「これら杜甫の墓を詠ずる詩のうちのほとんどは、杜甫の死没地がどこであったのか、あるいは実際の墓地はどこにあるのかを確定しようとする意図に基づいて論及されることが多い」（二八九頁）。著者はこの観点に立って、唐代詩人が、杜甫の最晩年の経歴（死没地）を如何に認識していたかを個々の作品に即して整理し、考察する。その結果としてこの論文は、特徴ある杜甫伝記論となり、かつ又、「唐代杜甫受容史論」としての実質を備えるものともなっている。

北邙（邙山・芒山）は、洛陽の北を東西に延びる丘陵である。本書によれば、この北邙が墓域として形成されるのは、後漢に洛陽が国都となった時期であり、その後、西晋・張協の「登北芒賦」によつて、北邙＝墓域の文学的イメージが形成される。興味深いのは、「誰もがいずれは最後に帰着する場所である墓地としての象徴的な意味を賦与したのは、陶淵明」であり、一方「北朝詩には北邙の用例がきわめて少ない」（一八〇頁）という指摘であろう。即物的接触を遮断することによつて、文学的イメージが純化される。北邙の場合も、この例に漏れなかったことになる。

唐代になると、洛陽は再び詩人たちの行動範囲の中に取

り戻され、「多くの詩人が北邙を詠ずるようになった。その契機となったのは初唐の劉希夷等による歌行体の「北邙篇」などである」（二八〇頁）。この指摘を、評者なりに次のように理解する：歌行体のような歌辞文字は、イメージの客体化、一般化を特性とするものである。従って、北邙が歌行体の題目になったこと自体が、北邙のイメージが安定し成熟したことを意味するものである。——著者が解明したように、北邙のイメージは、時代によって変化した。詩を読む一つの大きな楽しみは、このような時代を逐い、作者を逐つての詩的イメージのうねるような変化を見出すことである。作品に現れた北邙を通時的に論じた本書の文章は、詩を読む面白さを教えてくれるだろう。

読み終えて、改めて気付くのは、本書にはまとまった総論がないということである。しかし考えてみれば、文学研究は、個別作品を離れて成り立つものではない。本書のように、個別作品と、個別表現への凝視の中から論を立てるのは、却って一個の見識なのである。本書が読者の前に繰り広げて見せる中国の哀傷文学の多様さは、それほどに魅力的である。

トップページにもどる